
小林ちゃんの歯車

中行くん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小林ちゃんの歯車

【Nコード】

N7210X

【作者名】

中行くん

【あらすじ】

戸塚区はついに、魔王軍の手に落ちた。

戸塚区はついに、魔王軍の手に落ちた。

しかし、再開発の進む横浜市第三の都市の陥落にもかかわらず、それはニュースになることさえなかった。魔王軍のあまりに周到な計画により、侵略は極秘裏に達成されたのである。

そして、魔王軍の幹部たち——至上の魔王、冷艶のウィッチ、死霊の狂犬——は、さらなる侵攻を目論むべく、戸塚駅西口を出て徒歩五分のところにある集合住宅の一室で、^{円卓}ちゃぶ台を囲んでいるのである。

「戸塚征服はおかげさまで完了なのでー、こんど宴会を開こうと思いまーす！ 和民で」

陽気な声を上げた死霊の狂犬は、骨まるだしの骸骨だ。喋るたび、動くたびにカクカクと音が鳴ってうるさい。

「そんなに悠長に構えていて大丈夫であろうか？ 戸塚戦線も厳しい戦いであった。他地域の勇者もまだ実力はないにしろ、着々と成長していると聞くぞ。できるだけ早く次の保土ヶ谷戦線攻略に向けた計画を立てたほうがいいのではなからうか。なんでも保土ヶ谷の勇者は、我々の軍に所属していたことがあると聞く。結構強いのではないだろうか」

浮かれる死霊の狂犬とは対照的に、魔王は冷静に先を見据えた意見を出した。さすがだ。まさに勝って兜の緒を締めるといった態度で、場に緊張感をもたらす。リーダーたる姿がそこにはあった。

見た目はヨレヨレのスーツを着たそこら辺にいる汚いおっさんだったとしても、やはり内面からにじみ出る「何か」が違いを感じさせる。たとえ、見方によっては河川敷に住み着くホームレスに見えたとしても。

「まま、魔王様、き、きつと大丈夫ですよ。ほ、保土ヶ谷の勇者はどうってことないですよ。そそ、それに、たまにはリリリフレッシ

ユも必要です。そそ、それで、リフレッシュには、え、宴会が最適です」

魔王とは対照的に、冷艶のウィッチはおどおどと小さな声だ。保土ヶ谷の勇者を侮っている辺り、甘さが垣間見える。

それにしてもピンク色のセーラー服に身を包むイメクラ嬢にしか見えない永遠の十六歳——魔術で若さを手に入れた——は落ち着きがなかった。普段からそうなのかもしれないが、もしかすると今日があの日だから緊張しているのかもしれない。ちなみにあの日とは、「女の子の日」のことではない。

「しかし小林ちゃん、やはり侵攻は慎重をきさねば」

ちなみに小林ちゃんとは、冷艶のウィッチのことである。

「でで、でも、たまには、や、休まないと」

返事をする小林ちゃんの横で、魔王はポツと頬をピンク色に染めた。どうやら「しんこう」と「しんちょう」を掛けた魔王渾身のギヤグをスルーされたことが恥ずかしかったようだ。

「とと、とりあえず侵攻は頭のかか、片隅に追いやって、た、楽しいことをかか、考えましようよ。た、楽しいことを考えたほうが得ですよ。」

ま、魔王様はどうせ今日死ぬんですから……あ」

言ってしまった。

「そうであるな。わしは今日死ぬんだから、大変なことよりも楽しいことを考えたほうが心地良く三途の川を渡れるというものである。やはり死ぬ前は堅苦しい侵略の計画よりも、心おどる宴会の計画の方がって、えええ！？」

わし、今日死ぬん！？」

下手くそなノリツツコミみたいになってしまった魔王は、「いや、今のは決して狙ったわけではない！」と、よくわからない弁解をして、さらに落ち着きを失っていった。額にテカテカの脂汗を浮かべキョロキョロする姿は、まるで得意先の上司に激怒されているダメ係長のようなだった。

「わし、今日死ぬん！？」

初耳だよ、という魔王の横で、小林ちゃんは「あ、言っちゃった、やややつちやったよー」と目元を手で覆い、死霊の騎士は「マジで、魔王様死ぬの？ え？ 魔王の遺産ってどうなってんの？ 家族って確か、いなかったよね？」と、すでに魔王の死後に思考を切り替えていた。

「小林ちゃん、わし、死ぬん！？ え、何？ いつもの占いでそうでしたの？」

「あ、えっと、まま、まあそうなんですけど、その前に、あ、いや、は、はい！ たた、たまたま魔王様が死ぬんじゃないかなーと心配になって、偶然、うう、占ったんですけど、そ、そしたらやつぱり死ぬって出て、ほ、本当に偶然占ってみたんですよ。ほ、本当です」

逆にあからさまな小林ちゃんの発言だったが、それよりも「死ぬ」という事実が魔王に衝撃を与えたようで、魔王はキョロキョロと辺りを見回しながら、立ったり座ったりしていた。

占いだといっても軽視してはならない。小林ちゃんの占いは、銀座の母のようなアドバイスのたぐいではなく、「予知」いや、「事前通告」といったものに近い。小林ちゃんの占いは確実に現実となるのだ。その占いがあるからこそ、魔王軍の周到な侵攻は成功するのである。そうでなければこの情報化が進んだ現代の日本社会で、極秘裏に戸塚区の侵略を達成することなど不可能なのである。

「わし、今日死ぬんだ……。てゆーかジョン！ 遺産の話とはどういうことか！ わし、死ぬんだぞ！ 失礼だろ！ いや、もちろん死ぬなればこそなのだろうが……」

魔王は思い出したように、死霊の狂犬ことジョンを怒鳴りつけた。「いえいえ魔王様。僕、悲しいです！ ドライアイじゃなかったら、涙が溢れてるところです。ところで魔王様、今まで集めた資産的なものとか、今後の軍の役職的なことは、どうなるんでしょうか？

軍想いの僕は、魔王様の死後のことが不安で不安で……。ま、まさか、次期魔王は僕ってことはないですよ。……え？ あざーっす

！」

浮かれに浮かれるジョンに対して、魔王はまず「ワクワクしすぎる！」と全体的な突っ込みを入れ、さらに「てゅーかお前ドライアイの前に目玉ないだろ！ 骸骨のくせに」と、細部にツツコミを入れた。見事だ。死を目前にして、なぜか魔王のツツコミは冴え冴えだった。

魔王は小林ちゃんに泣きそうな目を向ける。

「小林ちゃん！ なんとかわしが生き残る方法はないのだろうか？ いや、もちろんワシだって自分の死が怖くてこんなに慌ててるわけじゃないぞ！ ほ、ほら、ジョンの言うように、軍のことが心配なのだ。わしが死んだら、戦力ダウンは免れないであろう。もしかしたら軍が崩壊するかもしれん！ ほら、わしの求心力は絶大であるからな」

さすが魔王だ。この死と隣り合わせの状況でさえ、自軍の心配をするとは、リーダーの鏡である。慌てた姿でさえ見るものに威厳を感じさせるのは、やはり内面からにじみ出る何かのためであろうか。それとも魔王というネームバリューがそう勘違いさせるのだろうか。真相は闇の中である。

小林ちゃんは思案するように視線を宙に漂わせた。

「えええっと、まあ魔王様が生き残る方法は――」

「え！？ 生き残る方法あんの？ ふざけんなよ、小林ちゃん！ 魔王が死んだあとの遺産問題とか、昇格とかに心ときめかせた僕の気持ちかえせよ！」

「ジョン。君の気持は良く分かったよ。これからの査定に今日の発言は大いに参考にさせてもらおう。楽しい査定になりそうである。

さあ小林ちゃん、生き残る方法とは何かね？」

魔王のキラキラした瞳が、まっすぐと小林ちゃんへ向く。

「あ、ありません」

「よっしゃー！」

「ジョン。餌、やらんぞ！」

ちなみにジヨンは、もちろん犬の死霊だ。トイプードルとチワワのミックスである。また骨のため毛がないので、アレルギー持ちの魔王でもかゆくならない。

魔王は頭を抱え、^{田舎}ちやぶ台額をにあてた。

「大丈夫ですよ魔王！　だって魔王たまに人間に向かって言うじゃないですか。『わしは地獄からの使者である』、と。いよいよ、まさ・に、ですね！」

「黙れわんこが！　ああ、せっかく戸塚を征服したというのに、横浜市征服でさえも、やっと見えてきたというのに——」

「そのご意志、しっかりと受け継ぎました！」

高らかと声を上げるジヨンに対して、もはや魔王は言い返す気力さえ残っていないようだった。

「げげ、元気だしてくださいよ魔王様。ま、魔王様はいつもいい、言つてたじゃないですか。『我々の天国を作るぞ』と。まま、まさ・に、ですね！」

「小林ちゃん、君もか……」

しかしこの場に居るのは小林ちゃんとジヨンのみ。必然的に魔王が頼るのは小林ちゃんになってしまう。

「小林ちゃん、教えてくれないか。わしはいつたいどうやって死にゆくのか。せめてそれだけでも教えてもらえれば、心の準備ができるというものだ」

「そんなことより魔王様！。僕たち弁護士とか雇ったほうがいいですかねー？　遺産の分配とか、きつとモメると思うんですよね。魔王が死んだあとに」

「ジヨン。君は嬉々としてわしの死後の話をするのだな。ほんとうに羨ましいことだ。

それで小林ちゃん、どうなんだい？」

魔王はジヨンを華麗に受け流すことを覚えた。もはやジヨンが指の骨をおり数え、遺産の計算を始めたことなど気にもとめないようである。

「まま、魔王様、ざざ、残念ですが、ど、どう死ぬかは、わ、分かりません」

小林ちゃんは魔王から目をそらす。

「ええ？　小林ちゃん、分からないなんてこと、あるのかい？　わしの死を占ったんじゃないのか？　それなら死に方だってわかるはずだろう？　それに死に方が分からないのなら、本当にわしが死ぬのか分からないのじゃないかい？」

「ええ！？　死ぬかわかんないの？　それは困るぜ、小林ちゃん！　はつきりとこのご老体に真実を突きつけて、僕たちは遺産配分の話に花を咲かせようぜ！」

「じゃあわしは天国からその話し合いに鮮血の花が咲くことを祈ろう」

魔王は上手いこと言ったけど、どや？　という表情を小林ちゃんに向けた。小林ちゃんはその表情に対して、引きつった愛想笑いを返すしかなかった。

「まだ死ぬかはわからん！　小林ちゃん、そうであろう？」

「いいいいえ、あの、実際死ぬんですけど、あの、死に方は本当に、わわ、分からないっていうか、あの、本当に、べべ、別に私が魔王様暗殺計画を立ていて、その計画が魔王様に知られない方が都合がいいとかは本当になくて、ほほ、本当に分からないんです。べ、別に私が立てた計画を遂行する為に魔王様の最期を隠しているわけでは、ほほほ、本当にはないですよ」

言ってしまった。

「え？　つまり、わし暗殺計画を立てたのは小林ちゃんで、本当はどうやってわしが死ぬかは分かっているけれど、教えない方がすんなり死ぬだろうからあえて黙ってるってこと？」

小林ちゃんの目論みが、見事に魔王に伝わった瞬間だった。

「なな、なんでそれを！？」

小林ちゃんのド天然は、残念ながら本物だ。

そもそも小林ちゃんの占いは確実に当たるので、一度占ってしま

えばどう行動しようと結果は変わらない。今回の魔王暗殺計画もすでに成功は約束されているので、この場で多少ボロが出用が構わないのだ。

いつもこんな感じなので、小林ちゃんの気は緩みっぱなしなのである。

それでも一応計画を黙っておこうとするのは、彼女の律儀な性格ゆえかもしれない。

「てゆうかもはや死ぬことよりも、小林ちゃんがわしの暗殺計画を立てたことがショックであるぞ！ え？ なぜ？ わしが死んだら、戦力ダウンであるーが。確実に」

その通りだ。いくら小林ちゃんやジョンが魔王に匹敵する強さとはいえ、魔王が一番強いのは明らかだった。これから全国各地の勇者と戦っていくにおいて、魔王がいたほうが有利であることは間違いない。

「ただ、確かにせ、戦力は落ちますけど、そ、そのかわり、け、結束力が上がるっていうか」

「——え、わしが結束を乱してると？」

そもそも、リーダーが結束を乱していたとしたら、おしまいである！

「ああ、いい、いえ、け、決してそういうわけじゃないんですけど、ただ、ただ、ちょっと、ま、魔王様は嫌われておられるというか」

「遺産配分の話はまだー？」

「ジョン、君は本当に計画的なワンコであるな、感心感心。」

てゆうか、えー！ なに？ わし、小林ちゃんに殺されるほど嫌われたってこと！？ 言つてよー。悪いところは自分では分からないから、言ってくれなきゃ直らないよー」

そこには子供のように駄々をこねるヨレヨレのおっさんがいた。

「え、え、どんどこが悪かったの？ その時いつてくれれば直したよー」

「でも魔王の悪いとこいちいち挙げてったらきりがないよねー」

「ジョン、わしは今まさに飼い犬に手を噛まれた気分である」

魔王はこんな場面にも関わらず「どや顔」を再び小林ちゃんに向けた。

「ききき、基本的には大好きなんですけどね。とと、いいですか、だだ、だいたいす好きなんですけど、た、ただ好きな部分を嫌いな部分が凌駕してくるといいますか」

「で、どこが悪かったんだい？ はっきり言ってくれ！」

引きつった笑顔を浮かべていた小林ちゃんの表情が、能面のような無表情に変わった。

「たとえば今みたいに大して上手くないこと言ったあとに私に向けるどや顔とか生理的に受け付けません。ただでさえオヤジっぽい発言聞くのは苦手なのに、顔を合わせるたびに苦笑いしないといけない私の気持ち考えたことがありますか？ センスの無さを自ら露呈するのはいいですから、さっさと死んでほしいです」

「……きゅ、急に流暢に」

小林ちゃんはよっぱど溜まっていたらしい。さらに滑らかに言葉が続く。

「戦闘のあととかに私の服がぼろぼろになってたりするときに『なんだよ小林ちゃん、誘ってるの？ 困るよわし、そういうんじゃないんだよねー。そんな官能的な格好されたってさー、ほら、うちの軍って、恋愛禁止じゃん？ わしそういうとこ誇り持ってやってるからー、小林ちゃんの気持ちには応えられんのだよ。すまん』とか言っつマジでセクハラだと思っつんですよね。そもそもどのツラ下げて私に話しかけてるんだろっつていうか、鏡みたことあるのかなとかいろんな疑問が湧いてくるんですけどそういった分不相応に気付けないところが頭の悪さを反映してると思うんですよ。しかもちよつと強いからって偉そうにしてくるじゃないですか。だけど人間的な強さってきつと戦闘力では測れないものだし魔王様から戦闘力を取り除いたらその辺のゴミクズの方がよっぱど役に立つと思うんですよね。あ、人間的な強さっていいましたけど、そもそも魔王様

はゴミクズに近い存在でしたね。ごめんなさい忘れてください。そういうえば私は影で魔王様のことを汚物って呼んでるんですけどけどね、それこそが魔王様の力だと思っんですよ。よく考えると、汚物だからこそ市民は恐れおののいているに決まってると思いますし。だってビルの屋上とかの高いところから群衆に向かって『わしは地獄からの使者である』とか言う汚物ってある意味怖いじゃないですか。ある意味ですけど」

「ここから飛び降りたらわし、死ぬるかなあ？」

窓際に立つ魔王にもはや威厳はなかった。威厳は「魔王」というネームバリューによる錯覚だったという真相が、日光に照らされて明るみに出たようだ。

「ただ、だめですよ！死ぬなんて、そんなの！」

小林ちゃんは立ち上がり、魔王に向かって言い放った。

突然の代わり身、さすが女の子だ。

「……え？」

「魔王様！ま、まだ、死なないでください！」

小林ちゃんは、ここに来て魔王に「まだ生きてください！」と力強く訴えかけた。

「小林ちゃん、君、本当は、やっぱり、わしのこと」

魔王の頬がピンクに染まる。気持ち悪い。

「ま、まだ利用価値があるんです！わ、私の計画通りに死んで下さい！」

「え？」

「そんなことより弁護士は北村先生がいいと思うんだけど、行列の空気を読まないジョンに対して、魔王はどこかすがすがしい笑顔を向けた。

「ジョン。北村先生は素晴らしい方だとは思いますが、少々相談料が高いと聞くぞ。もう一考の余地があるかもしれんな」

「ふーん。魔王様は物知りだね。じゃあ僕はネットでもう少し調べてみるよ」

魔王はあまりの逆境に、頭がやられたのかもしれない。すがすがしい笑顔だと思ったら、今度は表情に険がこもり、両手をばたつかせていた。

「小林ちゃん！　そもそもわしが死ぬというのは所詮占いであろう。ただか占いの結果、小林ちゃんの計画が成功して、わしが死ぬ『かもしれない』と言っているだけであろう。しかし現実のわしはまだ生きていて、未来を変える力だってあるのだ」

もはや支離滅裂だ。

「そそ、そうですよ！　た、ただか占いですよ。も、もちろん外れることなんて絶対にならないので、こ、これから言うことは、ご、ご機嫌取りの妄言なんですけど、き、きつと魔王様ならば未来を変えることだって、か、可能ですよ！　だ、だって魔王様じゃないですか。も、ものすごい、ね、ネームバリューですよ。ただ、だって、魔の王様なんですから。こ、これから私の占いのとおりに死ぬのは間違いないとしても、も、妄想の中くらいなら生きられるかもしれない」

ある意味小林ちゃんの方が支離滅裂だった。しかしなぜか小林ちゃんの言葉を聞いて、魔王の目に力がこもった。

「小林ちゃん、そこまで自分の占いに自信があるというのなら、教えてくれないか？　わしはいつたいどうやって死ぬのかということ」

「え？」

逆境。しかし、魔王もやはり百戦錬磨、それを忘れてはならない。「占いに絶対の自信があるというのなら、どう死ぬのかくらい言ってもよからう。言ったところで、わしがその天命とやりに抗えないのであれば、結果は同じことじゃ。そうであろう、小林ちゃん」確かに、その通りだ。ここで魔王が真実を知ったところで、占いに自信があり、未来が決定していると信じるならば死に方をバラしても問題はない。

「いい、いいですけど。べべ、別に、あの——」

しかし、その占いを信じきれなかったとしたら、どうだろうか。

たとえば、この計画の共犯者——手紙で呼ばれ、遠い地方から来た小林ちゃんをよく知らない勇者とか——がこの部屋に隠れていたとして、もしも魔王の首を狙っているのであれば、小林ちゃんが計画を喋る前に、カタをつけようと思うのではないだろうか。

「ああ、あの、実はこの部屋には」

何かのきっかけで、ことは大きく動き出す。それがまさに、この時だった。

突然、魔王の背後にあった木製のクローゼットの戸が開き、中から人が飛び出してきた。振りかぶる大剣と、華奢な体に纏う真っ黒なスピード水着。

間違いない。勇者だ。

「魔王覚悟——」

計画が魔王に伝わる前にカタをつけようとしたのだろう。

大きく振りかぶった背丈ほどの大剣を魔王に向かって振り下ろす。すると、ちゃぶ台が乾いた音と共に二つに割れた。

「……なにっ!？」

大剣を振り下ろした勇者は、予想していたはずの手応えと違い面食らっていたようだ。標的であり、たった今そこにいたはずの魔王の姿はなかったのだから。しかしそれは単純な話である。魔王は音速で勇者の背後に廻り込んだ。ただそれだけのこと。

「わしの背後を取るとはいいい度胸であるな。だけどそれならばこそ、自分の背後も気にしないといけないのではなからうか」

ゆっくりと低く響く魔王の言葉が紡がれる間、勇者は振り向くことさえできなかった。実力の差は恐怖に変わり、その場で勇者を支配したのだ。

「火の海っていうのも、なかなか乙なものだと思わないか？ 見たところ、泳ぐのは得意のようである」

魔王の右手が勇者の肩に触れる。それは怪我人に手をさしのべるような、慈悲深い動作に見えた。しかし、勘違いしてはならない。

魔王なのだ、彼は。

魔王の手元が強い光をあげ、同時に勇者が激しい悲鳴を上げた。勇者は青白い炎に包まれ、みるみるうちに人から人あらざるものへと変化していく。

悲鳴は一瞬だった。肺が焼かれ、勇者は空気を失ったのである。

「魔王様ー。貸家なのに、まずいですよー」

ジョンの視線の先、天井には若干の焦げ跡が残っていた。ジョンも、小林ちゃんも、悪なのだ。人間ではなくなってしまった勇者を、誰も気にはけはしなかった。水着の化学繊維・タンパク質などが燃えて独特の匂いが部屋中を満たすも、その程度の匂いはいつものことなのだろう。彼らは常に焼け野原と共にあるのだ。

「てゆーか小林ちゃん。もしかして、これ？　こんな不意打ちでわしが死ぬとでも？」

水着の勇者はリサーチ不足だったに違いない。もし小林ちゃんの占いの精度を知っていたれば、このような戦略はとらなかったはずだ。「まま、まあ、そ、そうなんですけど。たた、ただ、まだじょじよ、序章っていうか、計画の全貌は見えないっていうか」

その時、突然床下収納が開き、男が顔をのぞかせた。床を持ち上げながら男が叫ぶ。

「死ね魔王ー！　グ、グア、熱ッ！」

シネマ王？　いや、忘れて欲しい。男は残念ながら叫んだ瞬間に魔王に見つかり、魔王の手のひらから放たれる光線によって燃えさかるのだった。この部屋は五階なのに、どうして床下収納があるんだろうという疑問は誰からも発せられぬままに。

「いやだから小林ちゃん、こんなじゃ死なないって」

勇者が襲いかかるたびに、魔王の実力がまざまざと明らかになる。それでも、勇者は引かない。

次の瞬間隣の部屋から二人組が突入した。一人は拳銃を魔王に向け、もう一人は小刀を両手に持ち魔王に飛びかかる。

その二人に向い魔王が両手のひらを向けると、一瞬部屋全体が玉

虫色に光り輝いた。

「貴様らでは、無理である」

確かに白いタイツを全身にまとう二人組が魔王を倒すのは無理に思えた。そして、思ったとおりふざけたタイツを着た二人組では無理だったのだ。

凍りついたように、二人の動きは封じられた。あろうことか小刀タイツは、空中で静止していた。

二人の方へと、魔王は一步一步近づく。しかし二人は動くことはおろか、近づく魔王に焦点を合わせることさえできないだろう。

魔王は左手を天井に向かって掲げた。するとどこからか銀の液状のものが空中に漂い、そして棒状へと実体化する。その手で掴むはファルシオン。広い刃が特徴的な魔王の剣。

魔王はそれをゆつくりと両手でつかみ直し、哀れに空中で静止するタイツ男に向い、ファルシオンを振り上げるように切り裂いた。刀身は確かにタイツ男を通り抜けたのだが、鮮血すら散ることはない。なぜならばタイツ男は「静止」しているのだから。

「小林ちゃん、いくらこんなことを繰り返してもわしは死なんぞ」

魔王はさらに歩みを進め拳銃タイツの正面に立った。ファルシオンを振り上げ、拳銃タイツに狙いを定める。

攻撃の瞬間。

それは、隙と言い換えていい。

突然天井の収納が開き、お祭りで売っているようなピカチュウの面を被った成人男性が魔王めがけて飛び出した。

空中でピカチュウ——名誉のためにいつておくが、クウチュウとピカチュウをかけたギャグではない——の面を取ると男の目は発光していた。すると目玉は前方に飛び出し、空中でクナイに変形した。クナイは、勢いそのままに魔王の肩付近をとらえた。

「クッ、抜かったか」

魔王は手早く拳銃タイツに一撃を浴びせ、ピカチュウ仮面に向き直る。

静止魔法は解け、天井に浮いていたタイツはゴトリと床に転がった。そして、二人の純白のタイツは赤く染まってゆく。

魔王の無血を破ったピカチュウ仮面は、しかし残念なことに視力を失ったようで、「目玉目玉」とまるで「めがねめがね」のように地面を這っていた。

魔王は躊躇なく、ピカチュウ仮面にフルシオンを振り下ろす。

「ピッカア！」

愛らしい悲鳴と共に、ピカチュウ仮面、落つ。

「てゆーか何人いんのよ？ 小林ちゃん、いくら続けても同じだつて」

「ででですが魔王様、か、確実に魔力は減ってますし、たた、体力も失ってます」

「そうだよ！ もう魔王様が死ぬのは分かったから、遺産のこととか、明日以降の建設的な話を——」

「黙れワンコが！」

それ以降も魔王の首をとらんとする勇者が部屋の至る所から溢れ出し、魔王に襲いかかった。収納スペースがありとあらゆる所に確保されたこのマンションはかなりの優良物件に違いなかった。家賃はいくらなのだろうか。

しかし彼らがいくら襲い掛かるうとも、マンションが優良物件であるうとも、魔王に致命的なダメージを与えるものはいなかった。

それでも魔王の体力、魔力は、少しづつ、しかし確実に奪われてゆくのである。

魔王は強い。しかし、今日魔王は死ぬ。小林ちゃんの占いの精度をなめてはいけないということは、関東地方の裏界隈では有名な話である。

時刻は十一時半を回った。

魔王は、ペンギンの着ぐるみを着た勇者に苦戦していた。

ペンギン勇者は冷蔵庫から飛び出すと同時に口から消化できなかった魚を吐き出すという秘技で、魔王の体力を大幅に削ることに成

功した。結果として魔王に斬り殺されるのだが、それでも魔王の息は上がっていた。これが初老の男の限界なのだ。魔王が今日死ぬことは間違いない。それは、誰かが魔王にとどめを刺すことを意味する。

つまり、順番なのだ。

弱りに弱った魔王。まだ息をしている彼に、最後に斬りかかる勇者はだれか、最後の勇者はだれかというだけの話。

それならば、そのタイミングを待てばいいだけのこと。

時刻は十一時五十分を回った。

魔王は人参みしたいな男に襲われている。しかし、人参男も所詮は三下に違いなかった。

ファルシオンが人参男を貫くと、オレンジ色のにんじんジュースが辺りに飛散した。

「い、痛ッ！」

飛散したにんじんジュースが魔王の目に飛び込み、両手で目をこすっている。

今だ。

俺は観葉植物の影から飛び出して、日本刀で魔王に斬りかかった。「覚悟しろ！　魔王、お前に保土ヶ谷の境界は越させない！　う、うわっ」

不覚にも、足をにんじんジュースに取られて滑り、俺はその場にうつ伏せに倒れた。

「ん、なんだこいつは」

背中に刃物の感触。

「ぎゃっ」

俺、最後の勇者じゃなかった。

薄れ行く意識の中で、魔王の会話が聞こえる。

「こ、小林ちゃん。よくこれだけの勇者を集めたよね」

「いいい、いえ、集めただなんて、そ、そんな。た、ただ、魔王様が死ぬ前に、各地の勇者を極力殺してもらったほうが、あとで楽なんじゃないかとか、そ、そんなこと、け、計画してませんから！そ、それに、今から私が魔王にとどめを刺して、次期魔王になろうとか、か、考えてませんから！」

「小林ちゃん……、結構野心、あるんだね、え、ちょ、こばやグホオツ！」

「あ、小林ちゃん、遺産の件なんだけど——」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7210x/>

小林ちゃんの歯車

2011年10月19日01時04分発行